

式 辞

やわらかな日差しを浴びて木々のつぼみもふくらみを増し、春の訪れを感じるこのよき日に、御来賓の皆様、保護者の皆様の御臨席を賜り、北本高等学校第49回卒業証書授与式を挙行できますことを、教職員一同、心よりうれしく思います。

120名の卒業生の皆さん、御卒業まことにおめでとうございます。

保護者の皆様にも、心よりお祝い申し上げます。

皆さんの晴れやかな顔を拝見しながら、三年間の歩みが、一つの大きな物語として、いまこの場に結実していることを感じています。

ここにいる三年生、卒業生を一言で表すなら、

それぞれが自分の立場を見つめ、場に応じて力を発揮できる、たいへん頼もしい学年でした。

五十周年記念式典の大きな舞台に立ち、地域と協働する模擬議会に挑み、部活動の場でも学校の名を背負って全力を尽くす。

その一つ一つの姿が、北本高校の歩みを確かに前へ進めてくれました。

目立つ役割も、支える役割も、それぞれが欠かせない存在として力を出し合い、

「この学校にこんな素晴らしい生徒たちがいるのだ」と、多くの人に感じさせてくれました。

今日、皆さんは学び舎を離れ、それぞれの道へと巣立っていきます。胸の高鳴りと同じだけの不安も、きっとあることでしょう。まず自分に問いかけてみてください。「今の自分は、何に心が動くのだろうか」。その小さな心の震えこそ、これからの皆さんの羅針盤になります。

今日は、漫画家のやなせたかしさんと、詩人の茨木のり子さんのお話をします。

お二人は、若くして完成された成功者ではなく、五十歳を過ぎても問い続け、信念を貫き、作品を生み出し続けた人でした。

やなせたかしさんは、戦争の現実を身をもって知りました。「ほんとうの正義とは何か」という問いを胸に、長い年月温め続け、その思いは「おなかをすかせた人を助けるヒーロー」--アンパンマン--として結実します。

皆さんに問います。「あなたにとって、助きたい誰かは誰ですか」。

茨木のり子さんは、戦争によって青春を奪われ、感受性を抑え込まれた時代を生きながらも、その経験に向き合い、戦争のない美しい理想郷を探究する詩を書き続けました。歯切れのいい言葉で時には自分や他人にも楯を飛ばす詩を書いています。「自分の感受性くらい 自分で守れ ばかものよ」という言葉は、今も私たちを叱咤し、励ましてくれます。

皆さんに尋ねます。「あなたは、自分の感受性を、誰かの評価に委ねていませんか」。

かくいう私も、自分に言い聞かせ続けている問いがあります。

「何が生徒のためにできるか、何が最善か」。

問い続けることをやめなかったからこそ、今日、皆さんの前に立っているのだとも思います。

大切なのは、勝ち負けや戦いではありません。問いを持ち続ける勇気です。夢に挑戦し、たとえ失敗しても感動する心を手放さないことです。

最後にもう一つ。

「この三年間で、あなたが本当に心を動かされた瞬間はいつでしたか」。

その出来事と理由を忘れないでください。そこに、皆さんの努力の証があります。

茨木のり子さんが代表作「自分の感受性くらい」を書いたのは五十歳を過ぎてから、やなせたかしさんのアンパンマンのアニメ放映は、六十九歳のときでした。皆さんも年齢にとらわれず、自分の問いを大切に育ててください。

さて、今皆さんは、問いと希望を携えて、長く自由な人生の入り口に立っています。デジタル化が加速する現代ではすぐに差し出される答えがあります。けれどもどうか、与えられた答えに、思考を預けてしまわないでください。すぐには形にならない問いに、自分の言葉で、時間をかけて向き合うこと。その重みが、やがて皆さんを支える力になります。

あなたの助けを待っている誰かのためにも

どうか、自分が大切だと思うものを、問い続け、守り続けてください。

なお、本日の式に御臨席くださいました来賓の皆様には、私が問いを立てるプロセスにおいて多大なご助言お力添えをいただきました。この場をお借りして心より御礼申し上げます。

結びに、保護者の皆様に心よりお礼を申し上げます。皆様の深い愛情に包まれ、生徒たちはご覧のとおり、凛々しく成長しました。三年間の御支援と御協力に、教職員一同、深く感謝申し上げます。

卒業生の皆さんの未来が、問いと感動に満ちたものであることを願い、式辞といたします。

令和8年3月11日 埼玉県立北本高等学校長 本城 千晶